

## 『グローバル天理』第10号掲載論文要旨

### **井上昭夫 「巻頭言 宗教とスポーツ」**

柔道において天理大学出身者がすばらしい活躍をしたシドニーオリンピックが終わった。もともとオリンピックはスポーツ祭典で宗教儀式の一部だった。現代においても、スポーツにおける極限の崇高さは宗教的とも言えるものだ。

### **太田 登・中井精一 「天理教原典とやまとことば（10） 原典と表現法 [4] 一原因・理由表現【2】」**

1711首の歌に、上記で取り上げた原因・理由表現は9%、約11首に1の割合で出現する。出現部位では、上の句と下の句に明確に分かれる傾向やユエのように、助動詞「たり」と共起し、他とは異なる文語的色彩の濃い表現も認められた。

### **笹田勝之 「天理教における悟りの構造について—他宗教との比較を通して—（10） 第一章「知ること」について [5]」**

人格の完成、人間の形成の不可欠な根底は、敬・愛・信という敬虔な宗教心・宗教的情操を培う宗教の教育である。そして、この宗教の教育は、教育者の宗教的人格の感化に裏付けられてはじめて真の宗教教育となる。

### **堀内みどり 「天理異文化伝道（10）天理教のコンゴ伝道 [9] —初代会 長時代〈1963—1967〉 [3]**

高井を見物に訪れる人の何人かとの交流ができるようになった高井は、そのうちおつとめを教えるようになる。彼らに病人を連れてくるように言い、次から次へと「おさづけの理」を取り次ぐ。また、外へおたすけに出るようにもなり、布教活動が活発になるにつれて、警察当局から呼び出されることが度重なった。そして、布教認可を得るために、フランス語に堪能な飯田照明氏が本部から派遣されてきた。

### **金子 昭 「天理経営学—その歴史・哲学・展望—（10） 思想編 宗教 と経済・経営 [4]」**

キリスト教におけるグローバルな倫理においては、エコノミーとエコロジーとエキュメニズムが織り込まれている。本稿は、そのようなグローバル倫理の神学的展開について、Kung、WCC、J. Moltmann を引用して説明した。

## **佐藤孝則 「エコロジーの思想と実践（10）『沈黙の春』が生まれた背景」**

1960年代の米国社会に起きた環境保護運動のうねりを築いたのは、レイチェル・カーソンが著した『沈黙の春』である。彼女は苦学の末に、当時では珍しい「修士」の学位を取得した。海洋生物学者の彼女はベストセラーの本を著す作家でもあったが、ある時、その後の彼女の人生を変える1通の手紙を受け取った。

## **金子珠理 「ジェンダー女性学情報（10） ネイティヴのトポス [5] 」**

パキスタンのフドワード法(the Hudood Ordinances) の暴威を如何に解釈するか？ 文化的ムスリムとしてのスレーリ(Sara Suleri) の見解を辿る。ローカルとグローバルを繋ぐディアスポラとして生きる意味についても考察する。

## **小滝 透「天理比較神秘論への試み（10）人間と宗教 [1] 」**

今回は、同時代的な宗教比較をしばしやめ、人類と宗教の関係を心身構造の面や社会形態の面から記述してみた。宗教の存在を原点から考えてみたいと思ったからである。次回も引き続き、宗教史を遡りその発展過程を記してみたい。

## **小林正佳 「芸術・癒し・宗教（10）体操と音楽」**

近代日本の「体操」教育が目指したのは、兵士の身体と、その応用編ともいべき工員の身体をつくり出すことだった。とすれば、当然そこでは、それにふさわしいタイプの運動が選ばれたはずである。また、ある面で「音楽」教育も、それと同じ方向性を共有していた。二拍子の行進曲にあわせて歩く稽古は、それまでの日本人にとっては新しい経験だった。

## **上杉武夫「都市の再生に向けて——アメリカ通信（10）バーチャルワールドとサステイナブル都市について」**

I T (Information Technology) とバーチャルワールドの可能性と問題点を指摘し、サステイナブル都市の必要性を述べる。

## **塩澤千秋 「脳死・臓器移植—カナダ通信（10）臓器移植と宗教との関係 [3]」**

ユダヤ教でも脳死について色々の教義的解釈があるが、ここでは脳死を首切断と同じと解釈し、教義的に認められる死の判定とする意見を紹介した。

## **小椋 博 「宗教・スポーツ・賭け（10）キャンプ事故と偶然性」**

野外活動の本質は、日常生活に比べて遥かに偶然の要素に大きく左右される環境のもと、それだけに危険性を伴う非日常を経験することの魅力である。しかし交通や移動手段の発達、半ば人工化し、脅威よりも安全が保障されている「自然」を拡大し、それへのアクセスを容易にしている。そのためにここでの安全は「一つの可能性」（九鬼）、すなわち偶有性に依存するというよりも、安全の必然化という錯覚に捕らわれていることである。

アウトドア活動が真に危険なのは、それが自然の中で行われるからではなく、安全の偶有性の意識が希薄化し、安全の保障が必然視された「自然」の中でにおいて行われるからであると考えるべきである。